

氏名	武田 鉄郎
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	第4730号
学位授与年月日	平成17年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学位論文名	慢性疾患児の自己管理支援のための教育的対応に関する研究
論文審査委員	主査教授 新平 鎮博      副主査教授 岩堂 美智子 副主査教授 畠中 宗一

### 論文内容の要旨

本論文の第1の目的は、慢性疾患児の自己管理支援のための教育的対応とは、どのような視点をもって臨むことなのかを明らかにすることであった。教育的対応の中で自己管理支援の中核をなす領域「自立活動」において自己管理を支援するための内容・方法・評価などを提言することであった。また、第2の目的は、慢性疾患への適応に関する影響要因を整理し、慢性疾患への自己管理支援をより効果的に行うための認知行動面の特性と、知覚されたソーシャル・サポートや自己効力感の効用を明らかにすることであり、これらがストレス対処過程においてどのような効力を持っているのかを検証することであった。

本論文は、4部構成になっており、第1部においては、慢性疾患児の社会的対応とその課題について、慢性疾患の定義、身体障害者福祉法に分類される内部障害の人数、小児慢性特定疾患の給付人数、病弱教育対象児童生徒数などの現状を明らかにし、慢性疾患児が抱えている心理社会的な課題や、病弱養護学校を卒業生の追跡調査や進路指導、職業教育の全国調査から彼らの社会生活への援助とそれにかかわる問題について検討した。さらに、自己管理に関する問題に焦点を当て、病弱養護学校等で行われている自立活動について実践している内容等の現状と課題について検討した。

第2部では、病気の概念の発達段階とセルフケア疾病受容の過程とセルフケアの特徴や個人が慢性疾患に適応していく過程モデルを紹介し、対処過程や認知的評価に影響を与え、ストレス軽減につながる知覚されたソーシャル・サポートの効用を気管支喘息と腎臓疾患の児童生徒を対象に検証を行った。また、自己効力感の効用については、慢性疾患児を対象に、自己効力感の高い群の方が低い群よりも認知的評価においてはコントロール感が強く、対処行動においては積極的対処行動が多くみられ、その結果、ストレス反応が不機嫌・怒り、身体的反応、抑うつ・不安、無力的認知思考のいずれでも低いこと、主観的健康統制感において内的統制傾向の強いことを検証した。

第3部では、慢性疾患等で不登校等の適応障害になっている児童生徒の実態把握と教育対応について文献研究を行い、筆者の研究から、不登校の経験をもつ慢性疾患児と経験のない慢性疾患児の比較研究によりストレス対処過程において知覚されたソーシャル・サポートが低いこと、ストレス反応が高いことなどその特性を明らかにした。

第4部では、総括的考察として、知覚されたソーシャル・サポートや自己効力感の効用を考察し、これらの効用を自立活動の内容に取り入れ再構築した。個別の指導計画の作成による指導、体調変動、短期入院等から実態把握に困難を伴うことから形成的評価を重視した動的な評価の重視を提言すると共に、慢性疾患に合わせた自立活動のカリキュラム編成と自己管理支援について提言した。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、慢性疾患児の自己管理支援のための教育的対応とは、どのような視点をもって臨むことかについて論じている。つまり、慢性疾患児の学校教育、進学、就職等における社会的対応、社会適応、社会参加の問題点を浮き彫りにして、社会参加していく上で大きな影響をもつ自己管理能力を育成するために核となる「自立活動」に関して教育課程上の位置づけや慢性疾患用の指導内容等を検討し明らかにした。また、慢性疾患への適応に関する影響要因を整理し、慢性疾患への自己管理支援をより効果的に行うための認知行動面の特性と周りの人々からの支援、すなわちソーシャル・サポートの効用を明らかにした。この適応過程においては、ストレス対処過程や他者からの支援であるソーシャル・サポートとその効用、自己効力感と認知的評価、Health Locus of Controlとの関連を検討し、その結果をふまえて、自己管理支援のために「自立活動」という教育的対応に提言すべき内容を論じている。

論文は、序論と4部16章より構成されている。序論では研究の目的、第1部は慢性疾患児の社会的対応についての文献研究、第2部は慢性疾患の適応に関する心理・教育的対応をソーシャル・サポートや自己効力感、Health Locus of Controlなどの様々な尺度を用いて研究した成果をまとめている。第3部では、慢性疾患児のもつ心理的な問題として不登校にふれており、第4部では、以上の知見をもとに、自己管理支援のために新しい教育カリキュラムとしての教育的対応を考察・提言している。

第1部においては、身体障害者福祉に分類される内部障害の人数、小児慢性特定疾患の給付人数、病気を理由にした長期欠席の人数、病弱教育を受けている児童生徒数などの現状を明らかにし、慢性疾患の子どもと学校教育についても論じている。さらに心理的問題だけでなく、病弱養護学校を卒業生の追跡調査から、進路指導、職業教育の全国調査から社会生活への援助とそれにかかわる問題を明確にした。さらに、自己管理に関する問題に焦点を当てて、病弱養護学校等で行われている自立活動の内容等について現状と課題について論じている。

第2部では、健常児と病気の子どもの病気の概念に関する発達、発達段階とセルフケア、疾病受容の過程などを文献研究から慢性疾患への適応に関する影響要因を論じている。また、気管支喘息で入院している中学生67人、および、入院しながら隣接する病弱養護学校で教育を受けている中学生の腎疾患児44名を対象にしたソーシャル・サポート尺度とストレス反応尺度を用いた研究により、疾患や治療の特異性が一部影響を及ぼすことも推測されたが、各種のサポートによりストレスを低減できることを明らかにした。このことから慢性疾患児に対して知覚されたソーシャル・サポートを高める重要性について論じている。次に、全国の国立療養所など7つの病院に慢性疾患のため入院している中学生138名を対象にした自己効力感およびHealth Locus of Controlに関する研究、病院に入院しながら病弱養護学校で教育を受けている中学部生徒の腎疾患児44人と一般公立中学校の健常児61人を対象とし腎疾患児が自らの腎臓病についての意識KDQOL™(Kidney-disease-targeted measures of quality of life)も用いた研究から、自己効力感の高い群の方がストレス事態にコントロール可能感を持ち、積極的に対処する方法をとり、ストレス反応が低く、自分の健康に対して自主的に努力していこうとする意識が強く、このことは自己管理しやすい傾向にあることを明らかにした。このことから慢性疾患児の自己効力感を高める教育的かかわりの重要性を論じ、自己効力感を高めていくことは、QOL 向上の過程において重要な要因の一つであると結論できる。

第3部では、慢性疾患で入院し病弱養護学校で教育を受けている中学生136人を対象としたソーシャル・サポート尺度とストレス反応尺度および不登校の経験に関する研究から、慢性疾患から不登校に至らないように知覚されたソーシャル・サポートを高めることの重要性について論じている。

第4部では、以上の知見を要約し、慢性疾患児の自己管理支援のための教育的対応に関する提言や今後の課題について論じている。その中で、慢性疾患に合わせた自立活動のカリキュラム編成や指導内容を提言し、指導の個別化、評価の構造化について明らかにした。その際に、慢性疾患への適応に関する影響要因をまとめ、

慢性疾患児を支えるソーシャル・サポートと自己効力感の効用を高める教育的かかわりが自己管理を支援していく重要な要因であることを具体例を通じた考察で論じている。

本論文は、多くの尺度を組み合わせることで、解析が難しい慢性疾患児の特性を明らかにし、自立と社会参加のためには、知覚されたソーシャルサポートを高めることでストレス反応を低減することと自己効力感を高めることの重要性を明確にしたという新しい知見が得られており、加えて教育を含めたソーシャルサポートのあり方、中でも自立活動という教育のカリキュラムの新しい指針を提示し、教育の果たす役割についても明らかにしたことは高く評価される。

以上の審査結果から、本論文は、博士（学術）の学位に値すると認めた。